

---

## 石垣市の史料調査から

新城 敏男：名城大学国際学部

---

よく沖縄県の地方史料の大半は八重山にあるといわれてきたが、それがどれほどの点数なのかは悉皆調査が行なわれていないので実数はわからない。石垣市史の編さんが進んでいるが、種々の理由で文書調査が一気にできるものでもない。今回の「沖縄における地方史料の情報化」にかかわって明らかにされた3つの史料群について若干のべておきたい。

私自身は、当初は仲地班の「沖縄の社会に関する研究」に属していた。石垣市史編集にかかわっていたため、『石垣市史』古文書編家わけ文書の第1巻が「石垣家文書」であった。この文書は以前から知られていたが、初校ゲラの段階で原本との校合を行なうため、初校が出るたびに石垣家にお伺いした。ある日、「こんなものが倉庫にありました」と言って、大きな袋を持って来られた。開けてみて驚いた。なんと中には古文書が入っていたのである。石垣家の庭園は「石垣氏庭園」として、国の名勝に指定されている。その庭の願いを年に一度するとのことである。その準備のため倉庫にある器具を出そうとしたら偶然見つけたそう。校合の仕事と庭の願いが重なって、これまでまったく知られていなかった古文書が出てきたのである。僥倖とはこういうことを言うのだろうか、と思った。これで石垣家文書の全貌が明らかになったと思う。

豊川家文書も以前から14点は知られていた。その文書を見せていただくために伺い、いろいろお話を伺っているうちに、「裏座にもまだあるが整理していない」とのことであった。以前の調査で何故14点であったのかは、ご当主が代替わりしているのが不明だが、出された箱には古文書などが未整理のまま入っていた。それらを整理したのであるが、古文書などもさることながら、明治期以来の書状・葉書・電報も548点が保管されていたのである。これほどの文書類が大切に保管されてきたのに驚嘆した。年賀状などは現在のように多量に受け取ることはなかったであろうが、それらも保管されているのである。豊川家文書は11世善佐氏時代のものが大半を占めている。善佐氏の『自叙伝』は、善佐氏が75歳で亡くなられた昭和12年に自筆稿本に若干の訂正を加えて、刊行された。本書の巻末には善佐氏の詳細な履歴が記されているが、その辞令は1通も見つかっていない。一括して別置されているのではないかと伺ったが、見当たらないとのことである。これほど文書類を大切に保管されてきたのを考えると何らかの理由があるだろうが、まことに残念である。

喜舎場英勝家文書も戦後ハワイ大学のジョージ・H・カー博士がこの文書類の数点をマイクロフィルム化して知られていたものである。しかしその後の調査は行なわれておらず、今回初めてその全体像がほぼ明らかになったと思う。

今回の調査を行なうなかで、つくづく思うのは地元との関係である。よそから調査に出向くには限られた時間しかない。上にのべたように偶然が重なったの発見や足しげく通うなかでの発見などは、短時間での調査ではできることではない。地元での所蔵者と調査意識が旺盛でこまやかな配慮をもった調査者の対応が欠かせないのは当然であるが、その成果を所蔵者にどのように還元できるのかを考えていかなければならない。今回の調査だけでも新史料の発掘が相次いだ。全体的にもこれまででは唯一と思われるものもある。しかし地方史料目録データベース化が進めば、唯一ではないかも知れない。同じものが各地から発見されればさらに楽しみも増していく。今後もこの事業が継続して行なわれることを願っている。